一足のくつで一つの笑顔

中　二

私は今年の春休み、初めて海外へ行った。場所はミャンマー。「なぜミャンマー？」と思う人も多いだろうが、私たち家族は発展途上国と呼ばれているこの国を選んだ。

きっかけは、新聞に載っていた「ミャンマーの子供にくつを届けよう」というボランティア募集の記事。くつを持って、真っ白な歯を見せながら笑っている子供たちの写真が、私の目と心を離さなかった。

ボランティアの代表の方は、フィリピン旅行時、スラム街で「マネー」と言いながら集まってくる裸足や裸の子供たちを見たそうだ。屋外を裸足で生活していたら、当然けがをしやすいし、衛生的とは言い難い環境で破傷風になり、命の危険にもつながるだろう。その光景に衝撃を受け、子供たちに対して自分にできることはないかと考えている時に、五輪金メダリストの高橋尚子さんがアフリカの子供たちにくつを贈る活動をしていることを知り、これなら私もできると思い、このボランティアを始めたそうだ。

すぐに電話をかけ、私たちは、活動の第一歩である全国から集まったくつや文房具を仕分けする作業に参加させて頂いた。

しかし、待っていたのは、私が想像していた優しい心だけではなかった。絶対に使えないであろう短い鉛筆。黄ばみやしみのある破けた古いノート。壊れた鉛筆や、使いかけの消しゴム。さらにはゴミまで同封された段ボールもあった。

おそらく「貧しい国なのだから、こんな物でも喜んでもらえるだろう。」という思いなのだろう。当然、心のこもった物もたくさんあったし、中には活動を応援する手紙まで添えてくださる人もいた。その気持ちもわかるが、複雑な気持ちになった。

仕分け作業から約一か月。私は日本を飛び立ち、ミャンマーの空港に立った。聞いたことのない言語が飛び交う中、周りを見渡すと私たちとは違うはだの色をした人ばかりだった。改めて、外国に来たと実感した。

私たちは滞在中、二つの寺を訪問した。ミャン

マーでは、寺が学校や孤児院の機能を果たしている。それも、無料でだ。この国は仏教への信仰がとても厚く、誰もが寺にお布施を行っており、それを財源としていた。

到着してすぐに寺の中にある学校や孤児院を見学させて頂いた。学校といっても壁のない青空教室もあった。孤児院の中は、一人一畳ほどのスペースの板の間で、何十人もの子供たちが生活していた。

次に私たちは、寺の子供たちとの交流活動として、なわとびや綱引きを行った。日本の文化を知ってもらうために、特技である空手の型を披露し、指導する時間もいただけた。ミャンマーの子供たちは終始笑顔で接してくれ、言葉は通じなくても、一緒に体を動かすことで、国を越えた友情が生まれたように感じ、本当にうれしく思った。

日本と比べると、決して豊かではない環境の中、両親と離れて暮らしているにも関わらず、太陽のような笑顔でたくましく働き、学ぶ姿に胸を打たれた。

日本から贈られたくつと文房具を段ボールから出していると、寺の子供たちが好奇心で目を輝かせて集まってきた。見ぶり手ぶりで足のサイズに合ったくつを一緒に選び、新品の文房具を手渡すと、はにかむような笑顔で受けとり、友達の中に走っていき、はしゃいでいた。

そして、さらに驚いたのは、ボランティアの代表の方が、寺の責任者の僧侶に、

「この活動がご迷惑になっていませんか。」

と尋ねたことだ。自分たちが良かれと思ってしたことでも、相手にとってはそうでないこともある。先に書いた使い古しの文房具のような、独りよがりの偽善にならないように、そして相手の尊厳を傷つけることがないように、常に配慮しながら活動を続けているのだと知り、日々の生活の中でもその思いを忘れてはならないと痛感した。

新聞記事を目にするまでは、発展途上国の子供たちのためにできることが私にあるのか、などと考えたことがなかった。どこか遠くのことだと、知ろうともしなかった。

今回の経験から私は、世界の子供たちのために、現地には行けなくても、「今、誰かのためにできること」があるのだと改めて感じた。

まず私ができるのは、周りの人に伝えることだ

と思った。個人にできることはほんのわずかなことだから、意味がないと感じる人もいるだろう。だが、力になろう、できることはあるかな、という一人一人の気持ちがつながれば大きな力となり、世界の子供たちの笑顔と人権を守ることができるのではないだろうか。

「一足のくつで一つの笑顔」

この言葉を、少しでも多くの人に広めていきたいと思う。